

「産むのは私」—表象のもつ暴力性

嶋澤 恭子

助産師，熊本大学大学院文化表象学分野

友人の出産

この夏，友人が出産したというので久しぶりに訪ねてみた。生まれた女の子は軽い内反足らしく，両足が包帯で固定されていた。「入院してる時にな，夜勤の助産婦さんが，この子の足を見て『お母さんのせいじゃないからね』っていうの。次の日の助産婦さんは，『ちょっと早めにお靴ができたね』って。あんまり心配してなかったのに，なんか親として『この足もっと心配しなあかんのや』って気にさせられたわ。でも入院中やったから，いやな褥婦って思われたら面倒やし，助産婦さんの親切心も踏みにじらんように，気がついたらこっちも良い母を演じてた。なんか疲れたわ……」。彼女は入院中のエピソードをそんなふうに話してくれた。そして，この話が私の心のどこかに引っかかっていた。

表象の暴力

お産の現場から離れてしばらく経つ。現在，私は熊本で文化人類学を学んでいる。今，気になっていることは「表象の持つ暴力性」について。簡単にいえば，ある物事を名づけて分類することが，いかに恣意的で，偏見的で，ある意味暴力的であるか，そしてその行為にいかに人は無意識であるか，という問題である。

たとえば，先に述べた私の友人は「内反足の赤ちゃんを産んで自分を責め，苦しむ母」として助産婦に名づけられ，カンファレンスで要注意褥婦に分類されてしまったのであろう。「内反足」とい

う事実から，何の根拠もなく要注意と分類され，それに呪縛されるかのように助産婦が過剰な声かけを始める。当の褥婦の気持ちは（無意識であろうと）無視されているのであるから，これはある種の暴力ではないか。友人は心のなかで「勝手に私のことをそんなふうに表象しないでよ」と訴えていたのだと思う。しかし，彼女は自分の置かれている立場ゆえ，それが言えなかった。

「入院」という状況は産む人にどうしても不利な立場を強いてしまう。病院内では専門職者が否応なくパワーを持つからである。この事実を目を向けると，「女性に寄り添う」などと簡単に言いきれない現実が医療の中に見えてくる。「産むのは私たちなのに……」。そんな言葉を忙しさや，システムのせいにして，聞き逃し，あるいはかき消していたのではないかと，と私自身，自問自答を繰り返した。

本当の意味で女性に寄り添うならば，助産婦もパワーを持つ医療者側に「NO」が言えなくてはならない。助産婦が「NO」と言えない医療の場で，どうして女性が医療者に「NO」と言えるだろうか。変革は足元から，変わるのは自分からなのだと考えさせられる。

ラオスのお産からみえること

私が人類学に興味を持ったのはラオスに出会ってからだ。10年前，青年海外協力隊でラオスに派遣されてから，その後も何かとご縁があり，足しげく通うようになった。

今年の3月に私が訪れたとき，村はちょうど農



閑期。家の建て替えラッシュのなか、村長がいい年をして結婚してない私を気の毒がって見合い相手を探してくれていた。丁重にお断りしたが、なんとも有難い(?)お話であった。

そんなある日、村でお産があった。ガヤガヤと村人たちが家に集まってくる。男たちは酒の入ったビンをもって宴会を始め、子供たちは息を潜めて赤子の誕生を待つ。女性たちは産婦を横目に自分の出産話をしたり、旦那の愚痴をこぼしたり、家の用事を済ませに戻ったり。いよいよとなると、囲炉裏端に座っていた産婦の巻きスカートの中を姑が時々覗き、そのうちに子供が産み落とされる。しばらくして赤子が泣き出し、胎盤が出る。夫は魚網の網糸で臍をくくり、家の壁に編みである竹を一本抜き出し小刀で削って臍を切る。「生まれたのかい？」酔っ払った近所の親父が覗きに来るが、おばあにどやされ退散。「ヒュー」と誰かの冷やかしの声に笑いがおこる。つられて少し笑った産婦は汚れた巻きスカートと下半身をお湯で洗って、夫が腕に注いだ薬湯を一口飲み、そのまま囲炉裏端で休んだ。庭先では鶏をメインディッシュに親戚ご近所の宴会が続き、私も酔いつぶれてしまった。

生活の中にあるお産。お産は病気ではないこと。しかし、同時に生死を懸けた出来事でもあること。そして村全体の社会的行事であることを私はラオスで教わった。

常識を疑うのは屁理屈屋？ それとも……

私が学んできた助産と援助はどこか似ている。

どちらも前提として「助けを求める人、援助が必要な人」がそこにおり、この前提は疑われるよりむしろ時には強化される。しかし、私はあえてこれを疑ってみたい。

人々は本当に助けを求めているのか。「助けを求める人」という前提は虚構であり、それを作り出しているのは他ならぬ私たちなのではないか。このシビアな問いを前にして「あなたを助けるのは私です」などと言えるであろうか。

女性の気持ちはさて置いて、問題点を見つけ出しては表象化し、危険因子として分類していく姿勢は、本来、助産婦の目指すべき方向ではないように思う。「助けを求める人がいる」のではなく、「あなたの傍に助産婦がいます。あなたが必要とするならばお手伝いをいたします」というスタンスが本来の助産ではないだろうか。お産の主体は助産婦ではないのだから。

とはいえ、私自身も「女性の傍に助産婦がいます」と正面から言うてしまうことには、やや抵抗がある。目指すべき「助産婦像」と自分を重ね合わせたとき、理想とは違う等身大の弱い「助産婦」の自分を隠蔽してしまうことになりそうだからだ。それに、私にとって現実とは理想とはまだ程遠いものである。自分に正直でいるためには現実の自分、そして「産む人の声」から考えられる自分でありたいと思う。

私が原点を感じることでできる場所を持ちたいと願うのは、そのためかもしれない。

次回は、三重県のヤナセクリニック婦長の高野味鈴さんにバトンタッチします。